

## 【新学術領域研究（研究領域提案型）】

### 人文・社会系



#### 研究領域名 トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築 —多文化をつなぐ顔と身体表現

中央大学・文学部・教授

やまぐち まさみ  
山口 真美

研究課題番号：17H06340 研究者番号：50282257

#### 【本領域の目的】

顔と身体表現は常に個人の由来を露出し、かつ顕著に表現し、あるいは個人が何者であるかを読み解くことができる、隠すことのできない媒体である。グローバル化が叫ばれる現在、これまで無意識に行ってきた顔と身体にかかわる営みを意識化し、それぞれの文化で「当たり前」とされてきたことを再考する領域を立ちあげたい。すなわち、多様な文化の中での顔と身体表現が持つ可能性、顔と身体を使いこなすことにより異文化理解を促す可能性を、心理学・文化人類学・哲学の視点から、既存の研究分野の枠組を超えてともに検討していきたいと考える。

本研究領域では他者と異文化を理解する試みを、顔と身体表現の無意識を意識化することにより行う。ふだん意識することのない視線の動きの解析から、さまざまな文化差が解明されつつある。このプリミティブな身体表現の意識化されていない点を意識化することにより、文化の中で閉じられたコミュニケーションを理解し、他者や異文化・異質性の受容を導きたい。多様な文化的背景と個の多様性から、顔と身体表現に関する共通性と異質性を、個人内・外・間という3つのレベルで多層的にあぶり出すことで、東アジア文化圏に位置する日本の人文社会から新たな研究領域を構築する。

#### 【本領域の内容】

顔と身体表現の文化による多様性を検討する研究と（研究項目 A01）、意識化されない表現の意識化のための基礎的研究（研究項目 B01）として、「顔認知の潜在的・顕在的学習過程とその発達を知る認知

心理学的実験研究（行動実験、視線計測、生理反応計測）やその神経基盤を探るための機能的脳イメージングを用いた検討、また大規模調査による顔認知や身体表現の能力・方略スペクトラムのデータベース化も進める（研究項目 A01 と B01）。文化差の解明に貢献した眼球運動測定を駆使し、文化による多様性を検討する研究（研究項目 A01）では、持ち運び可能な実験システムによる文化比較や文化人類学的フィールドワークを組み合わせた研究を行う。顔と身体表現の比較現象学（研究項目 C01）では、顔と身体表現に関わる歴史や文化の分析を通じて、その意味の再構築を試みるとともに、化粧行為や様々な行為の中で顔と身体表現を解釈していく。

#### 【期待される成果と意義】

心理学、文化人類学などの実証的なアプローチに加え、顔と装いに関する哲学的な視点も取り入れ、アカデミックな領域のみのインパクトを越えて、広く社会全体に真の異文化交流の意義と視点を広げていきたい。哲学は言葉と概念を駆使し、個々の事実とその解釈を1つの表象へとまとめ上げていく作業でもある。顔をめぐる他者理解／異文化理解の問題を、広く社会に啓蒙していく手段を模索していく。また、化粧や装いについても広く考察し、ヴェール・スカーフや仮面などがもつ社会的意味を考え、女性ならではの特性も生かしながら、顔と文化について広く啓蒙していきたい。本研究領域では心理学と文化人類学・哲学を基礎として、人文社会の様々な領域の枠組みを融合することにより、「顔と身体表現」の異文化理解における新たな視座を提供する。

#### 【キーワード】

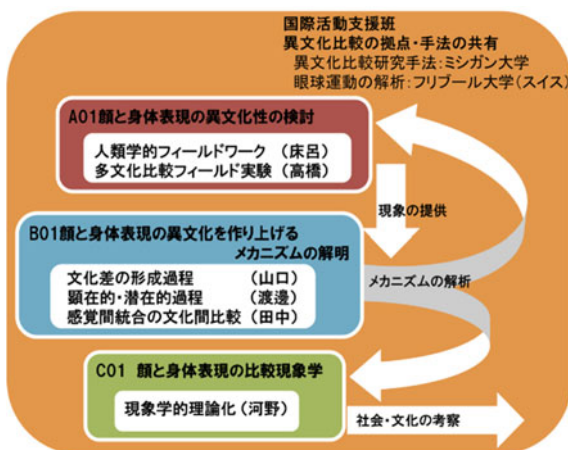
トランスカルチャー状況、顔と身体表現

#### 【研究期間と研究経費】

平成 29 年度－33 年度  
573,300 千円

#### 【ホームページ等】

<http://kao-shintai.jp/>  
[contact@kao-shintai.jp](mailto:contact@kao-shintai.jp)





研究領域名 和解学の創成—正義ある和解を求めて

早稲田大学・政治経済学術院・教授 あさの とよみ  
浅野 豊美

研究課題番号：17H06334 研究者番号：60308244

【本領域の目的】

本領域は、紛争解決学が国際関係論を母体として欧米で発展してきたことを踏まえ、それを東アジアの固有の歴史的な脈と結び合わせ、規範と実証とが調和したネーション間の「和解学」として高めていこうとするものである。和解学の最終目標は、ネーションが想像されるのと同様に、各国民が各々のやり方で和解を「想像」し得る学知の構築である。こうした規範的問題意識のもとに、5つの研究計画班によって実証的分析を遂行し、政府・知識人・大衆・市民という多様なアクターが、国内において、そして国境を越えて、重層的に織りなす関係、および共有される価値と文化に焦点を当て、歴史をめぐる問題の起源と展開の構造を明らかにする。その上で、ネーション相互の関係を想像するための知的インフラのあり方を提言し、東アジア地域の市民的意識の共有に向けた文化・教育政策の呼び水となろうとしている。

【本領域の内容】

本領域は、東アジア発の新しい学問としての「和解学」を世界に向けて発信するべく、分析の焦点となる研究対象に即して計画班を編成した。

政治・外交班と市民運動班は、和解に関する実証的な研究に取り組む。前者では、冷戦下に作られた政府間和解ともいうべき国交正常化枠組みが、どのように問題を封印していたのかが問われ、他方、後者では、そうした封印が冷戦後にいかに不安定化し異議申し立てにさらされたのか、いかなる和解と正義の観念が存在したのかが焦点となる。

次に、表象や言説が分析の焦点となるのが、歴史家ネットワーク班と、和解文化・記憶班である。この二つの班は、1990年代以後の冷戦終結を受けた民主化とグローバル化に対応した歴史問題をめぐる新しい試みに焦点を当て、なぜそれが機能不全を起こしたのかを検証するチームである。前者では政府間で合意された歴史共同研究事業が、後者では映画・ドラマ等の共同制作の興隆と衰退が、その焦点となる。

こうした実践と表象レベルを結んで、東アジア固有の歴史的文化的特性を背景として、国民感情と一体となった「正義」のあり方を、総合的に探るのが、思想・理論班である。

総括班は、以上のような知見に基づく研究成果を国際的に発信しつつ、和解の想像を可能とせしめる、強靱な国際的連携の構築に当たる。

【期待される成果と意義】

最大の成果は、和解を想像せしめる必要条件ともいふべき知的インフラの構築である。具体的には、概念・理論と、それを踏まえた情報、および人的ネットワークの構築である。総合的な視点から、和解を想像し得る社会的条件と、それを支える価値規範

を理論的に探求し、実証・事例研究によってそれらを深めていきたい。その実証・事例研究の部分は、世界の歴史紛争一般と東アジアの歴史問題についてのウェブ歴史辞典、『世界紛争歴史事典（仮）』として整備し公開される予定である。また、研究成果は、英語の叢書、Reconciliation Studies' series（仮）としてまとめ、日本語においても分かりやすい実践的な『和解学』教科書を発行する。

公募班の研究成果は、こうした総合的な研究成果の一部となることが期待される。

こうした英語・日本語での業績発信を可能とすることが、和解学創成のための強靱な国内・国際ネットワークである。その核として、まず、早稲田大学内に和解学関連研究所を創設し、スーパーグローバル大学支援事業による教員招聘と大学院生教育プログラムの充実と連携させながら、早稲田大学大学院の副専攻として「和解学専攻」を設置する。また、キャンパスアジアプログラムとも連動させて、和解学による交流を実践しフィードバックを得ながら、実践的な場で和解学創成に取り組むたい。

また、様々な学問分野に分かれた研究環境を越えて、学際的な学問として和解学を育成すべく、その核となる学会組織の整備にも努力していきたい。

学問的な意義としては、日本発の学問を世界的に発信し得る可能性が第一に挙げられる。今後の世界が、より一層、ナショナリズムの悪循環に陥っていくとすれば、植民地責任追及の手は、いずれ、西欧諸国にも伸びていくことであろう。その際に和解学の知見は、大いに発展性を有する研究成果として、新たな応用が期待される。そうした世界に通用する学問の世界的発信こそが、和解学創成の大いなる成果である。

【キーワード】

和解、紛争解決、歴史認識、記憶、和解文化、東アジア、移行期正義論、冷戦、普遍的価値、正義

【研究期間と研究経費】

平成 29 年度－33 年度  
243,100 千円

【ホームページ等】

<http://www.waseda.jp/prj-wakai/toasano@waseda.jp>